

第1回 「富山型ウェルビーイング住宅（仮称）」検討委員会 議事要旨

日 時 令和5年9月1日 14:00～16:00

場 所 富山県防災危機管理センター 研修室3-A

出席者 石田委員、川本委員、炭谷委員、瀬川委員、高野委員、八木委員、好川委員（五十音順）

1. 部長挨拶 市井土木部長 挨拶
2. 委員紹介 大西建築住宅課長 各委員紹介
3. 座長選任 座長に川本委員を選任
4. 座長挨拶 川本委員 挨拶 職務代理者に高野委員を指名
5. 資料説明
議題（1）：資料1、資料1（別冊）に基づき松本副主幹が説明
議題（2）：資料2、3に基づき米澤班長が説明
議題（3）：資料4に基づき松本副主幹が説明
6. 質疑応答
(座 長) 議題（1）（2）について質問や意見はないか。
(委 員) 普通は太陽光発電でエネルギー消費量をゼロにするが、富山県は伏流水等ほかの自然エネルギーも豊富。太陽光発電以外の創エネについての考察は行うのか。
(事 務 局) 富山の特色を出していこうという基準なので、必要ならば検討したい。
(委 員) 富山県では太陽光発電は難しいが、県産材利用もなかなか難しい。九州、四国等では県産材が安い、富山県では冬に雪が降るので林業従事者が休みになる。そのため、年間所得を考えて林業従事者の給料をある程度確保しようとする、どうしても一日賃金が高くなり、県産材の値段が高くなる。
(事 務 局) 農林水産部と連携しながら検討していく。
(委 員) 「とやまの木で家づくり支援事業」の助成は40万円が上限となっているが、令和4年度の実績はどうか。
(事 務 局) 令和4年度実績は補助金額970万円弱。65棟で、うち新築52棟、増改築13棟となっている。
(委 員) 県ではウェルビーイング指標として花に見立てた考え方を示しているが、これを住宅に置き換えて考えてみると、「健康」や「ゆとり」が当てはまると思う。まずウェルビーイング住宅のあるべき姿というものを、この指標に落とし込み、出てきた課題を整理すれば、県民にもわかりやすく伝わり、普及のエンジンになるのではないかと。単に性能だとか省エネだとか言っても、富山県らしさが出ないと思う。
(事 務 局) 次の委員会までに整理したい。
(委 員) 「ウェルビーイング」という言葉の解釈は結構広く捉えられていると思う。「富山型ウェルビーイング住宅」には福祉は含まれるのか。
(事 務 局) ウェルビーイングについては、排除するものはないという認識で、あらゆるものがウェルビーイングにつながると思っている。

- (委員) 例えば住宅取得困難者に住宅を提供することは、この「ウェルビーイング住宅」に入ってくるか。
- (事務局) そこまで想定していなかったというのが正直なところ。
- (委員) 仕事で省エネに取り組んでいる。私自身、断熱性の高い家に住んでいるが、エネルギー量が本当に減ったかというとなんか減っていない。これまでの住宅では、部屋が多くても、使用する部屋だけでエネルギーを使ったり、我慢したりするので、結局家全体でのエネルギー量はそんなに下がらない。
- 「ウェルビーイング」ということで、県民の幸福や健康が第一で、そのため断熱が必要だとかみたいな感じで、先ほど他の委員が言われたような形で進めていく方が、皆さん受け入れやすいのではないかと。
- (委員) 県民がどんな住まい方をしたいのか、どういうところに不都合を感じているのかといった実際的心声を確認する必要があるのではないかと。富山県は大きな家が多いが、実際には3、4室程度しか使われていないこともある。使用時間でいうと、リビングとキッチンが大半を占める。高齢者世帯の場合は、寝室、風呂、トイレのみの断熱化でも補助対象になれば取り組みやすくなる。住まい方に合わせた補助制度が望まれる。
- 富山県は冬になると、お風呂が寒い、暖房費が嵩む、交通の便が悪いということで、冬だけの施設利用者が多い。また、周りに空き家が増えている。そこを利活用して人を呼び込むことも考えないといけない。
- サービス付き高齢者向け住宅を増やしていくのではなく、介護しやすく、高齢者一人でも安心して住める安全性の高い住宅をどう供給していくか考えるべきだ。住み慣れた家で一人でも快適に生活できる住宅のあり方は「富山型ウェルビーイング住宅」の大事なポイントであり、また、その一方で避難でき、いつもつながることができる富山型デイサービスのようなところを地域に作っていければ、高齢者も健康に生活できるし、地域としても非常に強みになる。
- (委員) 新築に加えてストックも重要である。本当に寒い時は性能の悪い住宅に我慢して住む必要はない気がする。冬だけの施設利用については、季節によって住み分けるやり方もあるのではないかと。
- 住宅単体で考えるだけでは足りないのではないかと。個々の住宅事情を踏まえる必要がある。
- (委員) 高齢になると住まいにお金をかけない傾向があり、家が壊れていき、空き家になった時に老朽化が進んでいて使えず、価値がなくなる場合が多い。再利用可能な住宅にしていかなければならない。
- (事務局) 家全体をリノベーションするだけでなく、寝室、LDK、トイレの水回り等の部分的な改修でも、十分活用可能な住宅になると思う。空き家活用の促進につながるのを考えていきたい。
- (委員) 寝室だけでも18℃以下にならないようにすることで、血圧やヒートショックなど色々な問題が解決される。イギリスではそうした基準を設けていると聞いている。健康と寝室温度の関係などをもっと県民にPRし、寝室環境を整えるこ

とで健康状態はかなり変わってくる。

(委員) 「ウェルビーイング」については一人一人捉え方が異なるので、一つに決めるのは難しいのではないかと。自分は消費者の立場の他、民生委員、また家が寺であり、日頃高齢者宅を訪れることが多い。

高齢者の一人暮らし、高齢夫婦のみの世帯は激増していて、10年以内に空き家だらけになると感じている。周りでも高齢者が風呂場で亡くなられたと聞くことがある。暮らし方、生き方は様々なので、一人一人のニーズというものを考えていく必要があるのではないかと。老朽化した住宅をだましまし使っていて、火事や事故、熱中症などが起こっている。高齢者の一人暮らしや空き家対策など、色々な事を含めての「ウェルビーイング住宅」なんだという印象を持った。結婚、出産、退職などライフスタイルが変化したときに人は家を作ろうと思うので、幅広い人に周知していく必要がある。

大切なのは、設備とかよりも、そこに暮らす人たちがどう暮らしたいか、どう幸せに生きていきたいかということ。県民は太陽光発電の元がとれるか、維持管理しやすいか、災害に強いのか、防犯面がしっかりしているか、安心安全な暮らしができるかなど色々思いを巡らして家を建てるので、ウェルビーイング住宅のメリットをしっかりと伝えてほしい。また、アプリやサイトで選択すると使える補助制度が出てくると便利だと思う。

補助については、新築だけでなく、既存のリフォームにも使えるとありがたいし、買い替えや修理時の確約もあるとよい。

最近では職人不足とのことなので、若者の育成が必要。また、技術者の技術講習会や勉強会を進めてほしい。

(委員) 太陽光発電の動向については、最近では既存住宅の見積もりが増えている。新築ではコストが問題になっており、最近では物が値上がりしているため住宅のコストを抑えたいという思いが、作り手側、消費者側ともにあるようだ。太陽光発電(4kw)及び蓄電池を合わせると約250万円になり、補助金がないと導入は難しい。

電気代がこれだけ値上がりしているため、太陽光発電を設置する状況は整っているが、それを考えるタイミングがやや遅い。

最近の方は予算を決めてから、建てられる業者を探す。銀行は省エネを特に推進しておらず、太陽光発電導入の判断は住宅を建てる消費者になる。富山県では住宅を建てる方が若いのが特徴であり、健康のための家づくりという意識がない。

鳥取県のように「健康」を打ち出していくとよい。そういう意味では「ウェルビーイング」という名前は、色々な業界がつながりやすいキーワードになりやすい。

今後、銀行やケアマネージャーにも周知されればと思う。ケアマネージャーが断熱の知識を持つことで改修の範囲が広がるかもしれない。バリアフリーと省エネを複合的に捉える仕組みが大事だ。消費者にも健康な家にするため断熱を

良くするとか電気代が心配であれば太陽光発電を導入するとか、色々な情報を届けることも大事。

(委員) 太陽光発電については意識が変わってきている。北陸電力の電気料金がこれまで安かったのが上がったため、売電のメリットが上がっており、特に若い世代は太陽光発電に寛容になってきている。富山県は共働きの多く日中は誰もいないので、日中太陽光で発電して蓄電池に貯めておき、夜に風呂、台所で電気を使用するという形態は、非常に効率的だ。富山の生活スタイルにおいて蓄電池というのは今後住宅の大きな武器になると考える。充電した電気自動車から住宅へ電気を送る技術も出てきている。

(事務局) 性能から話を進めてしまったが、「健康」や「ウェルビーイング」から考え、住宅に落とし込み、県民に浸透させていくことを考えていきたい。貴重な意見をいただいた。

(座長) 今後、その方向で検討を進めてほしい。次に議題(3)についての意見はないか。

(委員) 資料の中の技術力向上について、計算にAIを活用できないか。

(委員) 施工業者の技術力向上は取り組みやすい。実際の現場では施工次第で差が生じることが想定される。職人の勉強会が必要になる。

(委員) いずれにしても、消費者がウェルビーイング住宅を認知し要求すれば、業界はついてくる。できないと置いていかれる。

(委員) 県民の困っていることによってやるが変わってくると思う。一つずつケアできる形が望ましい。色々な困りごとを助けることで、それが性能に跳ね返ってくると思う。

母は現在一人暮らしをしており、幸せに生活するにはどうすればよいのかと考えている。介護が必要になれば手すりや段差の解消が必要になるが、高齢になってからリフォームしてもなかなか慣れず、勘違いして危険なこともある。新築時から将来を想定してバリアフリーにしておくのが望ましい。

(委員) 新築か既存かによって変わってくると思う。ニーズをもっと細かくつかむには、もう少しきめ細かな調査をする必要がある。

(委員) 性能水準では外皮性能が大きなポイントだと思う。「健康」に直結する。断熱性能の国の指針は欧米と比較すると低い。国より上を目指すには民間のHEAT20のG1、G2、G3を目指さないと、10年後、県はレベルの低いものを推奨していたということになる。それをするからには補助金もきちっとセットでやらないといけない。断熱性能と気密性は重要なのでセットすべき。

ただ、計算ができないところを支援していかないと普及は難しい。

わかりやすい数値を設定した方がよい。鳥取県をベンチマークにすべき。県民に非常にわかりやすくメリットを発信しているので見習うべき。

(事務局) 鳥取県は参考にしている。鳥取県は補助制度のほか、認証制度や既存住宅に対する独自基準や支援など手厚いスキームを作っている。

(委員) 新築の性能水準をそのまま散居村等の古民家のリフォームに適用するのは難しい。規模の大きさと外観の課題がある。古民家の外壁に隙間があったが、雨に

- 濡れて壁の砂が膨らみ、隙間が無くなることがあった。古民家もきちんと残るような方法を考えてほしい。
- (事務局) 散居村等の伝統家屋は気密性が低いと考えられるが、景観も残していけるよう考慮したい。
- (委員) 新築では外皮部分の断熱・気密をきちんとするのが基本的な考え方だが、既存の部分改修は大きなテーマになる。
- (委員) 当社でも外皮性能の計算を4月から200件ほどしているが、新築住宅でUA値0.46～0.48程度であればサッシで対応可能である。コスト的には25万円から30万円程度のプラス、100万円は超えない。しかし鳥取県の場合は0.34に設定されており、「ウェルビーイング住宅」で同水準を設定した場合、よほどの補助が必要。富山の家は窓が多くて広い。100万円以内では無理。0.34程度なら200万近く必要。よって補助金のボリューム次第でこのレベルの基準設定が生きるかどうかということになる。ただ、個人的には選択肢としては設けてほしい。太陽光発電は好きじゃない人もいるし、後回しの事業者も多い。太陽光発電はオプションにするという方法もある。最低基準は等級6相当が現実的だと思う。
- (委員) 高いレベルの基準は残して、ターゲットはG2レベルぐらいが現実的なところか。それに見合う補助金が大きな課題になる。太陽光発電はオプションにする形を考えていけばいいかなと思う。
- (委員) 「とやまの木で家づくり支援事業」だが、助成金額の限度40万円のところ令和4年度実績で単純に割ると1棟あたり14万円になる。上限を変えなくても単価をアップすることはできないのか。
- (事務局) ご意見を踏まえて検討材料にしたい。
- 「ウェルビーイング」は一人一人様々であり、一人一人に対応するのは難しい。次回はウェルビーイング指標を整理させていただく。
- 「ウェルビーイング」の定義については、高齢者も若者もみんなに納得されるものを決める必要がある。「健康」が一つのキーワードだと考えている。「目指すべき姿」が一番上にあって、性能水準、推進方策とつながる形を整理したい。次回は、「目指すべきところ」「性能水準」「推進方策」の流れで議論をお願いしたい。
- 当初、令和5年度内に委員会を終了する予定だったが、既存住宅に関しても意見が出たこともあり、しっかりと進めていきたいので、各委員の了解が得られれば、次年度にまたいつでも議論をやらせていただきたい。
- (座長) 当検討委員会は年度内にこだわらないとのこと。いかがか。
- (各委員) 異議なし
- (事務局) 次回の検討委員会は、実態調査結果を取りまとめた上で開催する予定である。日時が決定し次第、あらためて事務局より連絡を行う。